

白山自然態系

# 手取川

文・南 健一 / 写真・木村芳文

北國新聞社



白山自然態系

# 手取川

文・南 健一 / 写真・木村芳文

うつくしき川は流れたり  
そのほとりに我は住みぬ

室生犀星

室生犀星は幼少期を過ごした金沢の雨宝院の真横を流れる犀川を“うつくしき川”と称えたが、私にとっての“うつくしき川”は手取川である。

手取川は野趣に富んだ清冽な流れである。国土交通省の調査によれば、この川の水質清浄度は全国の一級河川のうちベスト5に入るといふ。

白山、大汝峰の雪溪の滴りに発し、美川の河口で日本海に至る72キロ。その大半は両白山地の山間部を流れる。この間、手取湖という石川県民の水がめで一服し、いくつかの支流を集め、鶴来の天狗橋付近からは金沢平野の南端部を突っ走る。

この本の写真を撮ったのは白山を中心とした山岳写真家、木村芳文さんである。四国香川県の出身だが、彼が現在住んでいる第二のふる里は白山市瀬戸で、手取川上流の本流（牛首川）と最大の支流尾添川が合流して出来た山あいの小さな高原とも言うべき静かな憩いのエリアにある。

一方、筆者のふる里は平野部を流れる手取川の左岸、辰口橋の南詰の近くで、現在は水辺プラザと名づけられているあたりから南に歩いて4、5分の三ツ屋（能美市三ツ屋町、旧・山上村字三ツ屋）という寒村であった。

地元山上中学を卒業してこの地を離れたが、どの地にあってもこの川が、そしてこの川の“カワラ”が懐かしい。

南 健一



日本海上空から手取川河口と白山を望む

Canon EOS 5D Mark II EF17-40mm f/4L USM (32mm) ISO320 F8 1/1000 2012/02/29



獅子吼高原付近上空から手取川下流域を望む

Canon EOS 5D Mark II EF24-105mm f/4L IS USM (80mm) ISO320 F5.6 1/6400 2011/09/08



獅子吼高原から手取川扇状地の夜景

Canon EOS 5D Mark III EF24-70mm f/4L IS USM (38mm) ISO400 F5.6 6s 380枚を比較明合成 2016/08/31 19:21~20:03



白山頭首工 下流部は十八講河原と呼ばれる岩脈が続く。ここから七ヶ用水や白山水力発電所等へ送水される。

DJI INSPIRE 1 PRO Zenmuse X5 OLYMPUS M.9-18mm F4.0-5.6 ISO100 F7.1 2016/08/12



不老橋下流の上空から手取峡谷と白山を望む

DJI INSPIRE 1 PRO Zenmuse X5 OLYMPUS M.9-18mm F4.0-5.6 ISO100 F5.6 2016/08/10



手取川上流域(牛首川) 白山の巨大な山塊を巻くようにして流れる。

Canon EOS 5D Mark II EF17-40mm f/4L USM (17mm) ISO200 F8 1/1250 2012/02/29



大汝峰北東部上空から白山山頂部 こちら側に流れる水は庄川に、あちら側に流れる水は手取川に落ちる。

DJI INSPIRE 1 PRO Zenmuse X5 OLYMPUS M.9-18mm F4.0-5.6 ISO100 F6.3 2016/10/07

## 手取川源流

白山は「みくまり」の山と言われる。これは「水配り、水分」という意味である。この言葉通り、白山の山系からは、手取川、九頭竜川<sup>くずりゅう</sup>、庄川、長良川の4本の川が流れ出ているが、白山の主峰近くから流れ出ている河川となると、西方向へ流れ出る手取川と、東方向に流れ出る庄川の2本ということになる。

それでは手取川の源流はどこになるのであろうか。いろいろ話を聞いていくと、どうやら千蛇ヶ池<sup>せんじゃがいけ</sup>ではないかと思われる。この池は御前峰<sup>ごぜんがみね</sup>の西北にあって雪解け水は西方の千才谷を下る、そして千仞滝、湯の谷川を経て市ノ瀬に至り、同じく御前峰を水源とする柳谷と合流する。手取川源流域は牛首川とも呼ばれ、三ツ谷川等の支流を合わせながら白峰から北上して手取湖に流れ込む。



朝露に濡れたハクサンコザクラ

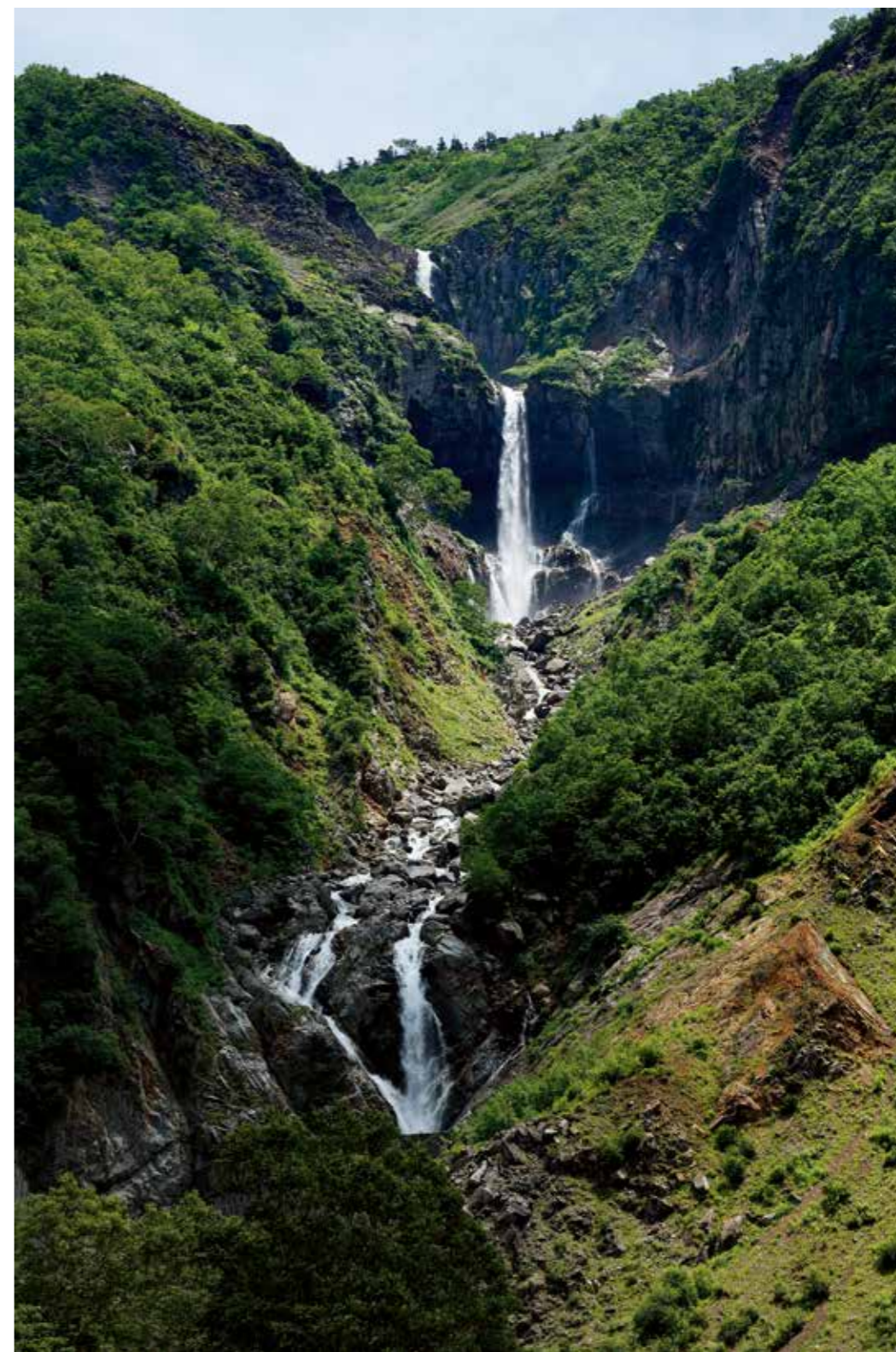


大汝峰上空から湯の谷源頭部



翠ヶ池

Canon EOS 5D Mark II SAMYANG 14mm F2.8 IF ED UMC Aspherical 2012/08/28  
星：03:23～04:28 ISO1250 F5.6 14s 296枚を比較明合成 背景：04:41～04:42 ISO1000 F5.6 10s 3枚を加算平均合成



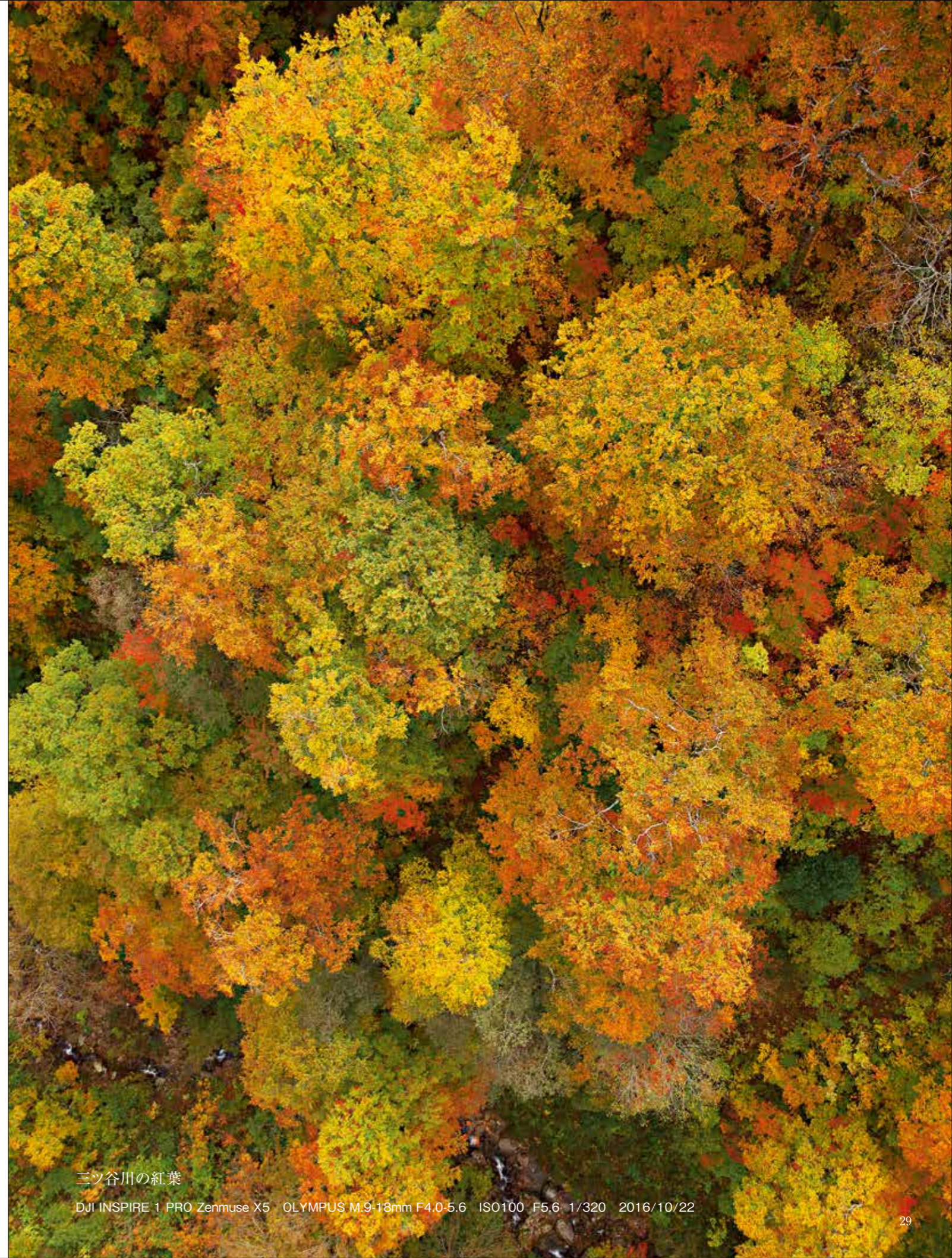
柳谷にかかる不動滝

Canon EOS 5D Mark III EF70-200mm f/4L IS USM (100mm) ISO200 F5.6 1/1600 2014/07/12



白山釈迦岳から白山山頂部を望む

Canon EOS 5D Mark III EF17-40mm f/4L USM (38mm) ISO200 F11 1/80 PL 2012/10/20



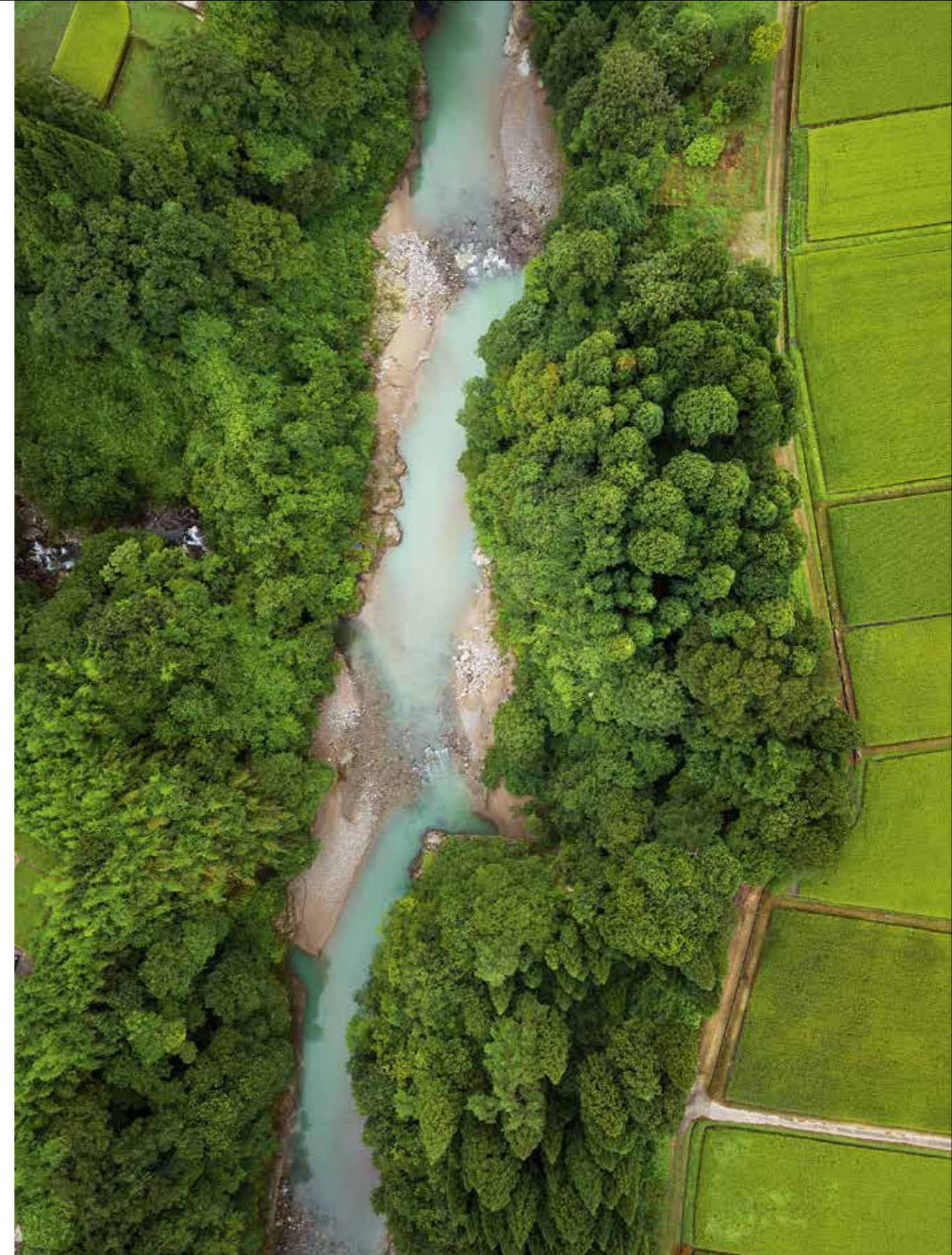
三ツ谷川の紅葉

DJI INSPIRE 1 PRO Zenmuse X5 OLYMPUS M.9-18mm F4.0-5.6 ISO100 F5.6 1/320 2016/10/22



冬の手取峡谷と白山を望む

DJI INSPIRE 1 PRO Zenmuse X5 OLYMPUS M.9-18mm F4.0-5.6 ISO100 F5.6 上下2枚をパノラマ合成 2017/02/04



手取峡谷

DJI INSPIRE 1 PRO Zenmuse X5 OLYMPUS M.9-18mm F4.0-5.6 ISO100 F6.3 2016/08/17



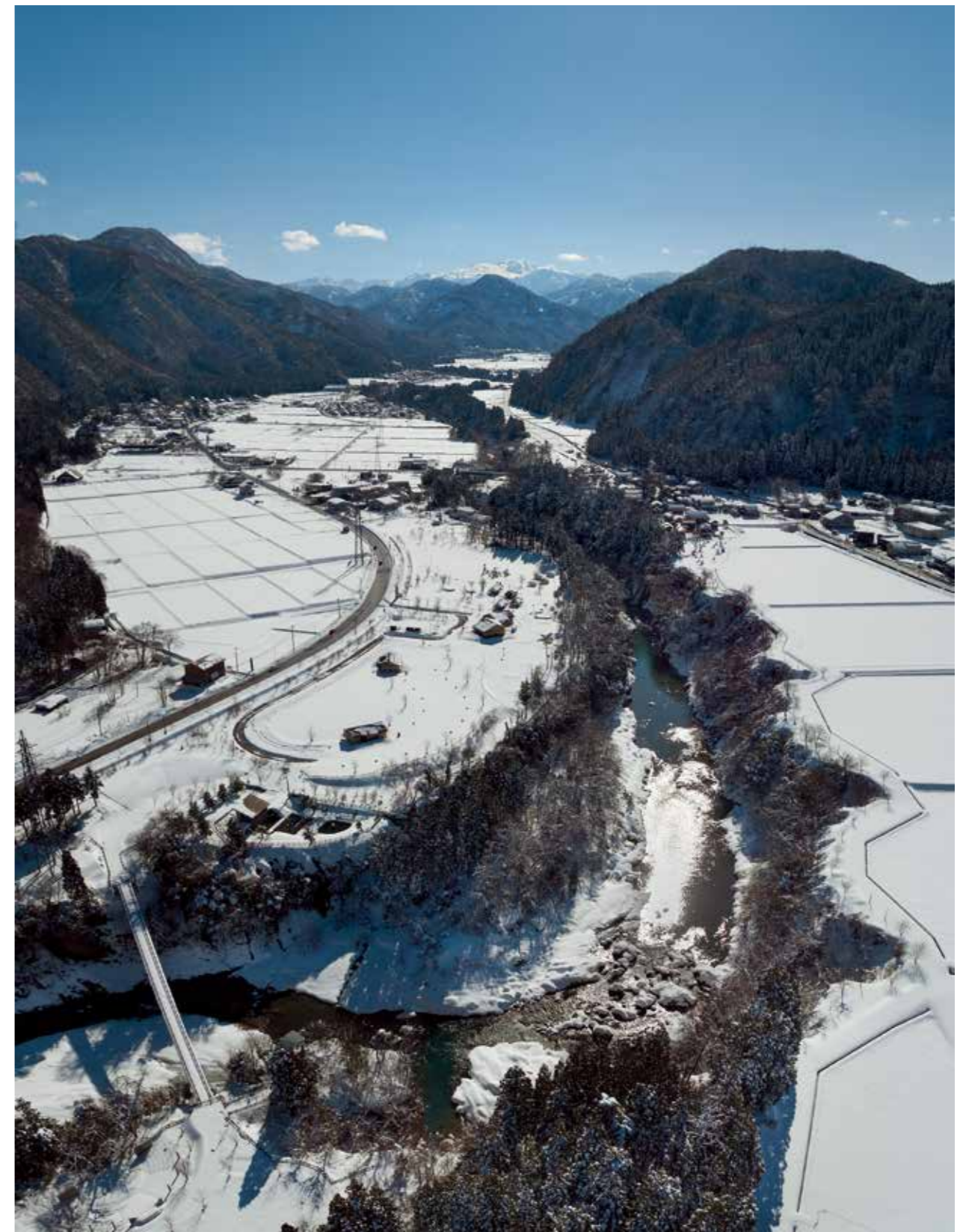
鳥越城跡付近上空から白山方面 左側に手取川、右側に支流の大日川。

DJI INSPIRE 1 PRO Zenmuse X5 OLYMPUS M.9-18mm F4.0-5.6 ISO100 F5.6 2016/09/10



大日川のホタル

Canon EOS 5D Mark III EF16-35mm f/2.8L II USM (16mm) 2014/06/28 19:41~21:12  
 背景：ISO1600 F4 13s 8枚を加算平均合成  
 ホタル：ISO1600 F4 13s 23枚 ISO3200 F4 13s 20枚 ISO3200 F4 25s 40枚 ISO3200 F2.8 25s 119枚を比較明合成



黄門橋下流の上空から手取峡谷と白山を望む

DJI INSPIRE 1 PRO Zenmuse X5 DJI MFT 15mm F1.7 ASPH ISO100 F5.6 2017/01/26  
 上下2枚をパノラマ合成し、高輝度部に露出違いの画像1枚をマスク合成



明神壁から見た天の川と手取川流域

Canon EOS 5D Mark II SEO-SP3 SAMYANG 14mm F2.8 IF ED UMC Aspherical ガイド:PH1-s 2015/05/19 23:45  
固定追尾合成法 固定フレーム:ISO1600 F4 1s 10枚 ISO1600 F4 3s 12枚 ISO1600 F4 9s 12枚 ISO1600 F4 30s 4枚  
ISO1600 F4 60s 18枚 ISO1600 F4 120s 6枚 追尾フレーム:ISO2000 F4 120s 65枚



手取川と夕日

Canon EOS 5D Mark III EF24-70mm f/4L IS USM (70mm) ISO100 F11 1/15、1/30の2枚をマスク合成 2016/08/31



手取川扇状地に沈むはくちょう座

Canon EOS 5D Mark II SEO-SP3 TAMRON SP 15-30mm F/2.8 Di VC USD A012 (26mm) 2016/10/03 01:30  
 ガイド：PH-1s M-GEN (Kowa LM50JC) 固定追尾合成法 固定フレーム：ISO1600 F5.6 30s 10枚 ISO1600 F5.6 9s 14枚  
 ISO1600 F5.6 2s 10枚 ISO1600 F5.6 1s 10枚 ISO1600 F5.6 0.5s 5枚 追尾フレーム：ISO1600 F4 120s 20枚

## の み 能美線と天狗山トンネル

「ゴーッ」。耳を聳<sup>ろう</sup>する反響音—電車が天狗山トンネルに入る。足もとからは「ギーッ、ギーッ」とカーブで車輪がきしむ音が響く。しばらくすると前方がパッと明るく開け、電車は絶壁の山肌を削り貫いたトンネルを抜けて、天狗橋の鉄橋へ。眼下には青く澄んだ手取川が白い波を立てて流れている。

少年の私は、運転席のすぐそばに立ち、自分自身が電車のハンドルを握っている気分になっていた。その痛快さ、ときめきは今も忘れられない。

能美郡山上村字三ツ屋という田舎で少年時代を過ごした私は、金沢に住む母方の祖父母のもとに遊びに行くのが無上の喜びだった。そしてそれには必ず、この電車、北陸鉄道能美線を利用した。能美線で鶴来まで行き、石川線に乗り換え金沢に行くのである。

美しくも懐かしい手取川の流れであった。

その後、1980(昭和55)年、能美線は廃線となった。線路跡は桜並木の小径となっている。



葉桜



線路跡の桜並木



辰口橋上流、手取川左岸堤防の桜

## ふるさとの四季 春

雲一つない空だが、水蒸気が立ち込めたような白っぽい不透明な青空だ。宏大な白山山塊の雪解け水は河原の中の流路を滔滔と流れている。

5月も下旬、見渡す限り万緑の河原。雲雀の鳴き声<sup>ひばり</sup>がする。この鳥はどうしてこんなに空高く舞い上がり、嬉しげにさえずるのだろうか。天空のどこかに止まり木ならぬ安住のスポットがあるのだろうか。あるいはまた、遠い山々や地平線の彼方を眺めていると嬉しくなってくるのだろうか。

そうではなかろう。きっと草むらにある大切な巣を、天空から監視しながら、巣の中にいる小鳥たちに「お母さんはここだよ。ここで見ているからね」と呼びかけているに違いないと思う。

ひばりに寄せて（抄出）  
シエリー  
ようこそ  
陽気な精！  
おまえは  
小鳥ではない  
天から 天の近辺から  
あふれるところを  
天来のゆたかな  
歌声にふりまく  
教えてくれ  
精か 鳥か  
どんな美しい思いを  
持っているのか  
これほど清らかな  
よろこびの奔流を  
吐き出した  
恋と酒のほめうたを  
わたしはまだ  
耳にしたことがない



辰口橋上流の流れと白山



明け方の手取川河口と美川の町

# み かわ 美川

河口の町美川。よくぞ見事な名をつけたものだと思う。ところがパンフレットによれば、明治2年に能美郡湊村と、石川郡本吉村が合併し、二つの郡から一字をとって「美川」としたのだという。由来は意外と単純だった。

美川は歴史のある町である。江戸時代は本吉と称し、藩の米蔵が置かれ、日本海の重要港として栄えた。また明治5年には県庁が一時期ここ美川にあったこともあり、県名も郡名から石川県となった経緯がある。

手取川は別名「石の川」と言われる。その流れは土よりは砂（小石）を運ぶ。河口付近では土は泥として海に流れ込むが、砂利や小石は堆積して海に入らない。このため、河口が次第に浅くなり漁港としての利用価値が低下し、代わって金属や紡績業が盛んとなったという。今では、美川仏壇、美川刺繍など美川の美技といわれる専門技術を持った職人の町として名を上げている。

小学校に入って間もない頃かと思う。母に手を引かれ美川町にあった遠い親戚の家を訪ねたことがあった。河口あたりの岸には何艘もの漁船が繋いであった。寒い朝、

それも早朝であった。ちょうどそのころ学校の音楽の時間に習っていた唱歌とその風景がぴったりと合った。

それ以来、この歌を聞くと  
び美川の風景が思い出される。  
懐かしい心の風景である。

冬景色  
 さ霧消ゆる  
 舟に白し  
 ただ水鳥の  
 いまだ覚めず  
 岸の家

湊江の  
 朝の霜  
 声はして



冬の日出



川が海と出会う処



手取川河口付近



河口付近の手取川と白山



海上から見た手取川河口

松 径

三好達治

王ならば宮居みやゐの廊ろうを  
もの思ひかくはわたらむ  
わがゆくは松のほそみち  
海青ていふし蝶てふひとつまふ

彼方なる加賀の白山  
まどかなる麦の丘への  
春の日の空にましろし  
彼方なる加賀の白山

わがゆくは松のほそみち  
何ごとをねがへるひまに  
老いはてしこれの影とや  
松の根に立てるこの影

彼方なる能登の岬は  
こゑありて波のはたてに  
日もすがら呼ばへることし  
彼方なる能登の岬は

詩人三好達治が加賀、能登を詠んだ詩である。

そう、ちょうど美川あたりの海岸の松並木を歩くと、こんな風景が広がるのかもしれない。

年老いた詩人が、春の日差しの中、一步一步踏みしめるように海岸の道を歩んでいる。

そんな光景が目には浮かぶようである。

日本海に注ぐ手取川



9784833020954



1920025020007

ISBN978-4-8330-2095-4

C0025 ¥2000E

白山自然態系  
**手取川**

定価 2,000円+税

発売 北國新聞社

